

聖徳太子一四〇〇年御遠忌記念シンポジウム
聖徳太子伝とその視覚化

2021年3月21日（日）

開催方式：オンライン（事前申し込み制）

主催：美術史学会（西支部大会）

仏教芸術学会

基盤研究(A)「中世拠点寺院の蔵書と美術
に基づく人と知のネットワーク解明」

（研究代表者：近本謙介）

聖徳太子1400年御遠忌記念シンポジウム

聖徳太子伝とその視覚化

聖徳太子が推古天皇30年（622）に崩じてから間もなく1400年を迎えます。それに先立ち、2020年には香雪美術館において聖徳太子をテーマとした展覧会が開催され、2021年には奈良国立博物館、東京国立博物館、大阪市立美術館、サントリー美術館において関連の展覧会が開催され、各地でさまざまな催しが企画されています。本シンポジウムはそうした時機にあたり、あらためて聖徳太子信仰の美術に焦点をあてるものです。

聖徳太子は「十七条憲法」や「冠位十二階」など倭国の政治の地歩を築くとともに、蘇我氏とともに仏教の受容を推し進め、その後花開く仏教文化の礎を築き、後世には日本仏教の祖として仰がれました。聖徳太子はその死にあたり等身の釈迦三尊や天寿国繡帳が作られ、『日本書紀』にまとめられた薨伝にはすでに聖人としての修飾がみられます。奈良時代になると、聖徳太子が生前に建立に与ったとされる法隆寺や四天王寺において霊廟が建立され、その伝記を絵画化した絵伝も制作されたと伝えられます。平安時代を迎えると、聖徳太子を観音の化身とする信仰が深まり、太子伝の決定版とも言うべき『聖徳太子伝暦』が編纂されました。また、聖徳太子の肖像が絵画、彫刻として作られるようになります。さらに鎌倉時代には、各寺院や各宗派が聖徳太子を祖師として仰ぎ、それにとまって新たな太子伝が作り出されていきました。そして、鎌倉末期には、聖徳太子の800年御遠忌を契機として、絵伝や肖像の制作がまさにピークを迎えました。

本シンポジウムは、このような古代、中世における聖徳太子信仰の展開を踏まえ、美術史研究と太子伝研究の双方の立場から、あらためて太子伝の生成と変奏、それに基づくイメージの形成について検討を試みるものです。また、本シンポジウムが日本美術における説話画や肖像についての研究の一機縁となることを願っております。

■プログラム

- 13：00 挨拶 根立研介（美術史学会西支部代表）
13：05 趣旨説明 藤岡穰（大阪大学）
13：10 報告1 榊原史子「古代における聖徳太子伝の生成」
13：45 報告2 三田覚之「聖徳太子信仰と太子伝の生成—造形作品の検討から—」
14：15 休憩
14：30 報告3 沖松健次郎「法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝と平安時代の太子伝」
15：05 報告4 村松加奈子「「真宗系」・「南都系」聖徳太子絵伝の再検討—静嘉堂文庫美術館本・妙安寺本を中心に—」
15：35 休憩
15：50 座談会「聖徳太子伝とその視覚化」
榊原史子・三田覚之・沖松健次郎・村松加奈子
司会：藤岡穰
16：30 閉会挨拶 藤岡穰（仏教芸術学会会長）

■申込方法・お問い合わせ

右のQRコードより、参加登録フォームにお申し込みください。

申込期限は3月14日（日）23:59までとなります。

開催日までに、ご回答いただいたメールアドレス宛に、参加に必要なミーティングID・パスコード、配付資料などをお送りいたします。



〈仏教芸術学会事務局〉

大阪大学文学研究科 日本・東洋美術史研究室内 email：butsugei@gmail.com / tel：06-6850-5126

聖徳太子1400年御遠忌記念シンポジウム

聖徳太子伝とその視覚化

報告概要

■榊原史子「古代における聖徳太子伝の生成」

『日本書紀』において超人的な能力を持つ聖天子として記され、国の礎を築いたとされた「聖徳太子」は信仰の対象となり、多くの聖徳太子伝が著されるようになっていった。成立年代を追ってこれらの太子伝を見ていくと、聖徳太子信仰が発展していった過程をたどることができる。平安時代に入ると、従来の聖徳太子伝の内容を集めた『聖徳太子伝暦』が成立するが、『聖徳太子伝暦』は太子伝の決定版として広く流布し、後世に至るまで影響を与え、聖徳太子のイメージが形成される基盤となった。本報告では、『聖徳太子伝暦』をはじめとする古代の聖徳太子伝に注目し、関連史料にも目を配りながら、太子伝の内容や成立の背景、聖徳太子信仰に与えた影響などについて改めて考えてみたい。

■三田覚之「聖徳太子信仰と太子伝の生成—造形作品の検討から—」

本発表では聖徳太子信仰と太子伝の生成について造形作品の検討から考察する。その際、7世紀前半、7世紀後半、8世紀前半というふうに、時代を区切りつつ話を進めたい。まず法隆寺金堂の釈迦三尊像について、光背銘文によって太子信仰がすでに生前から始まっていたことを確認し、台座内部の墨画や両脇侍像の背面に描かれた経綫文様から、後の太子伝にみられる神仙思想との関連を考察する。次に7世紀後半としては同じく金堂の薬師如来像に注目し、その台座規格や台座画の内容から、本来はおそらく山背大兄王追善の弥勒如来像として造立され、のちに法隆寺創建説話を記す光背銘文が成立した経緯について考察する。また8世紀前半は上宮王院（法隆寺東院）が創建された時期だが、その際集められた聖徳太子の遺品類に注目する。聖徳太子の前世は中国において慧思禪師であり、自らの魂を南岳衡山に飛ばして前世に用いた法華経を取得したという説話がある。その成立を考えるとときに重要なのは細字法華経と五綴鉢であり、中国の經典とともに使い古された鉄鉢が遺品とされた背景として上宮王院の創建時（739）に太子の前世譚が成立していたことを指摘する。

■沖松健次郎「法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝と平安時代の太子伝」

もと法隆寺東院伽藍絵殿の内壁に嵌められていた国宝の聖徳太子絵伝10面は、記録から延久元年（1069）に摂津国の絵師・秦致貞によって描かれたことが知られ、聖徳太子絵伝の現存最古の作例として、また平安時代のやまと絵障壁画の希少な現存例として重要な作品である。絵殿内の東・北・西の三方にコの字型に配列された画面には、現実の方位、地理的位置関係と対応するように、飛鳥から斑鳩、難波、そして中国・衡山に至る広大な山水風景の中に概ね『聖徳太子伝暦』に基づく60ほどの事蹟がそれらが行われた場所に描かれている。本図に関しては、美術史分野では主に画面構成、構想面の特徴が論じられてきているが、近年では歴史学の立場から図像についての考察がなされ、特に衡山の場面で、中国由来と考えられ、中世以降の作例に継承されていない図像があることが指摘されている。本図には他にも、いわゆる南無仏太子や孝養太子などに中世の作例に一般的な図像とは違う点が見られる。本発表ではそうした延久本に特徴的な図像についての紹介と考察を中心として、今後のより活発な議論のきっかけを提供したい。

■村松加奈子「『真宗系』・『南都系』聖徳太子絵伝の再検討—静嘉堂文庫美術館本・妙安寺本を中心に—」

14世紀になると、聖徳太子絵伝は主に掛幅本として多彩に展開し、太子を信奉する各宗派の寺院で受容された。現存する諸本は、根強い太子信仰を有する浄土真宗の寺院と、四天王寺・法隆寺を中心とした近畿圏の太子由跡寺院に集中的に伝わる。これらの間には一定の図像の規範性が認められることから、従来では前者を「真宗系」、後者を「南都系」と仮称して分類してきた。しかし一方で、真宗伝来でありながら「真宗系」の伝統と異なる太子絵伝がいくつか存在している。本報告では、「異質」とされる「真宗系」太子絵伝をめぐり、静嘉堂文庫美術館本（愛知・満性寺旧蔵、鎌倉時代）と茨城・妙安寺本（鎌倉時代）を中心に、法隆寺献納宝物四幅本（上野法橋筆・嘉暦元年[1305]）などの伝統的な「南都系」太子絵伝との図像的な接点や、祇園社絵所における太子絵伝制作について考察し、あらためて「真宗系」太子絵伝の多様性について考えたい。

報告者プロフィール

榊原史子（さかきばら ふみこ）

成城大学民俗学研究所研究員。日本古代史専攻。日本女子大学大学院文学研究科博士課程前期修了。成城大学大学院文学研究科博士課程後期単位修得退学。博士（文学）。著書に『『四天王寺縁起』の研究—聖徳太子の縁起とその周辺』（勉誠出版、2013年）など。

三田覚之（みた かくゆき）

東京国立博物館学芸研究部調査研究課主任研究員。大阪大学大学院博士後期課程修了。博士（文学）。著書に「天寿国繡帳の原形と主題について」（『美術史』57）、「技法から見た天寿国繡帳」（『フィロカリア』25）、「法隆寺献納宝物 金銅渾頂幡の再検討—造立典拠を中心として—」（『MUSEUM』第624号）、「法隆寺伝来 繡仏裂の分類と基礎的考察」（『MUSEUM』第636号）など。

沖松健次郎（おきまつ けんじろう）

東京国立博物館学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室長。筑波大学大学院芸術学研究科中退。修士（芸術学）。著書に「妙安寺本聖徳太子絵伝について：コラム」（『四天王寺亀井堂石造物調査報告書』、元興寺文化財研究所編、四天王寺、2019年）、「平安時代の宗教画における画中色紙形に関する基礎的考察」（『東京国立博物館紀要』49号、東京国立博物館、2013年）など。

村松加奈子（むらまつ かなこ）

龍谷大学龍谷ミュージアム講師（学芸員）。名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。修士（人文学）。著書に「中世聖徳太子絵伝の受容と展開に関する一考察—中世絵伝のネットワーク」（名古屋大学GCOE第4回国際研究集会報告書『日本における宗教テキストの諸位相と統辞法』所収、2008年）、「中世聖徳太子絵伝にみる三国伝来観—鶴林寺本聖徳太子絵伝をめぐって—」（『美術史』169号、2010年）など。